

イヴァン・ウルヴァロフ氏 公開レッスン&レクチャーコンサート

～古典派からロマン派への音色と音楽の可能性

出演者：イヴァン・ウルヴァロフ (Pf.)

日時：2019年3月21日 (木・祝)

会場：赤坂ベヒシュタイン・サロン

ドイツのカッセルムジークアカデミーで27年間教鞭を取っていらっしゃるロシア人ピアニストのイヴァン・ウルヴァロフ氏をお迎えして、レッスンとレクチャーコンサートを行っていただきました。今回が初来日だということです！ここでは、公開レッスンとレクチャーコンサートの様子をお伝えします。

ショパン：4つのマズルカ Op.30 の公開レッスンでは、全体として、細やかな感情の機微やキャラクターの違いを楽譜から読み取るような指導をされていたのが印象的でした。例えば、3曲目（譜例①）では、同じフレーズの連続で **f** と **pp**、**ff** と **pp** といった強弱記号が対比的に書かれているところが度々出てきますが、単なる音量の変化ではなく、勇気と不安、のように部分部分でどんな感情かということをはっきり決めると良いでしょう、とのことでした。最後の和音は、誇りを持った **f** で、とのアドバイスを受けて受講生がもう一度その部分を試してみると、実際にただの **f** ではなく誇らしげなたっぷりした **f** に変わり、ご本人もその解釈に納得された様子でした。続く、4曲目（譜例②）は1曲の中で常に変化に富んで、場面ごとに全く違うキャラクターにしましょう、と提案されました。冒頭は cis-moll の半信半疑な様子で始まり、会話のように。左のアルペッジョはやや音が厚すぎなので、もっと軽く (leise) しましょう。曲の終わり（譜例③）は句点「。」ではなく、「？」と考えさせるような終わり方で、と実演しながら、ご自身も楽しそうに指導されていました。

譜例①：ショパン：4つのマズルカ Op.30 より第3曲 Des-dur

The image shows a musical score for Chopin's Mazurka Op. 30 No. 3 in D major. It is written for piano and consists of two systems of music. The first system contains six measures, with dynamic markings **ff**, **pp**, and **f**. The second system contains six measures, with dynamic markings **pp** and **f**. The bass line features a rhythmic pattern of eighth notes with a dotted quarter note, often marked with a 'Q' and an asterisk. The treble line features chords and melodic lines with various articulations and slurs.

譜例②：ショパン：4つのマズルカ Op.30 より第4曲 冒頭

Allegretto.

Nº 4.

p *sotto voce*

Al. * *Al.* * *Al.*

* *Al.* * *Al.* * *Al.*

譜例③：ショパン：4つのマズルカ Op.30 より第4曲

pp *slentando*

ここからは、レクチャーコンサートの内容をお伝えします。

プログラム

ハイドン：ピアノソナタ Hob.XVI / 20,L.33

ベートーヴェン：《6つのバガテル》 Op.126

～休憩～

チャイコフスキー：ドゥムカ Op.59

グリーク：《抒情小曲集》より

〈春に寄す〉 op.43-6、〈小人の行進〉 op.54-3、〈トロルドハウゲンの婚礼の日〉 op.65-6

ショパン：華麗なるワルツ第1番 op.18

ショパン：ノクターン第8番 op.27-2

ショパン：スケルツォ第2番 op.31

前半は、ハイドンの初期のピアノソナタとベートーヴェンのかなり後期の作品《6つのバガテル》Op.126を演奏されました。ベートーヴェンはピアノの進化とともに曲を作る際にも実験的なことを行っており、

今回、ベートーヴェンが書いた通りのペダルの指示記号で演奏してみたいと、冒頭に語られました。氏のとても温かくやわらかな物腰で、演奏にもそのお人柄が表れているようでした。前半の演奏終了後、弊社社長の加藤よりウルヴァロフ氏への質問がありました。

加藤：非常にスケールが大きく感動しました。聴いていて、色々な音楽的な層があるなと感じたのですが、何か演奏に秘密があるのですか？

ウルヴァロフ氏：まずベートーヴェンが作曲した時にどういうイメージを持って作曲したか、何を考えて作ったかということを考えます。また、この赤坂サロンに設置されているベヒシュタインのモダンピアノも助けてくれました。この楽器では色々なことが可能です。様々な抑揚やダイナミクスをつけることができます。そして、左ペダルと右ペダルの使い分けによって音域感を出すこともできます。もしベートーヴェンがこの楽器を持っていたら、非常に感動し、他の楽器を押しつけてこれを弾いたのではないのでしょうか。

加藤：ベートーヴェン：《6つのバガテル》Op.126 では、ペダルについて、今日は当時ベートーヴェンの書いた通りに演奏してみると仰いましたが、なぜそのような選択をしたのですか？

ウルヴァロフ氏：当時と今のピアノでは違うけれども、リハーサルで試してみて、これならいつも色々な実験ができると感じました。

また、後半の演奏を終えて、ベヒシュタインの感想について聞かれると、ウルヴァロフ氏は、「ベヒシュタインは、音域のバランスが非常に取れています。スタインウェイは、力強く豊かな低音、きらびやかな高音域が出ますが、一方で中音域は非常に工夫しないと目指す音が出てこないのです。中音域に関しては難しいです。ベヒシュタインの場合は非常にバランスが取れており、タッチも弾きやすいです。また、音色の選択も可能です。」と語られました。ご自身もベヒシュタインピアノを所有されているということでベヒシュタインを熟知しておられ、プログラムも演奏もサロンの小さな空間と楽器の特性が活かされた内容で、大変勉強になりました。

(文責：前田)